

Hilbert変換と積分方程式

中央大学 物理学科 学部4年
香取研究室 高山大河

目的

ガウス型統計集団の固有値密度関数 $n(x)$ は、Coulomb気体の方法によると

$$\text{p.v.} \int_a^b \frac{n(y)}{y-x} dy = x \quad (1)$$

を満たす。この積分方程式を解くために、より一般的な形である積分方程式

$$\text{p.v.} \int_a^b \frac{f(y)}{y-x} dy = g(x) \quad (2)$$

をHilbert変換を用いて解いていく。

ただし、p.v.はCauchyの主値積分を意味する。Cauchyの主値積分は、積分区間 (a, b) 内の点 $x = x_0$ において無限大となる関数 $\xi(x)$ に対して、

$$\text{p.v.} \int_a^b \xi(x) dx \equiv \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \left(\int_a^{x_0-\varepsilon} \xi(x) dx + \int_{x_0+\varepsilon}^b \xi(x) dx \right), \quad 0 < \varepsilon \leq \min(x_0 - a, b - x_0) \quad (3)$$

と定義される。

Hilbert変換

$1 < p < \infty$ として、関数 $\phi(x)$ を L^p 空間に属し、区間 $(-\infty, \infty)$ 上で定義された関数とする。この時、 ϕ のHilbert変換 $H(\phi)(x)$ を

$$f(x) = H(\phi)(x) \equiv \frac{1}{\pi} \text{p.v.} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{\phi(y)}{y-x} dy \quad (4)$$

と定義する。ここで、関数 $f(x)$ は(4)式によりほとんど至る所で定義され、 $f(x)$ もまた L^p 空間に属する。

Hilbert変換の性質1(Fourier乗算作用素)

関数 $\phi(x)$ に対するFourier変換を $\mathcal{F}(\phi)(\omega)$ とする。この時、

$$\mathcal{F}[H(\phi)](\omega) = -i \operatorname{sgn}(\omega) \mathcal{F}(\phi)(\omega) \quad (5)$$

が成り立つ。

Hilbert変換の性質2(相反定理)

$1 < p < \infty$ として、関数 $\phi(x)$ を L^p 空間に属し、区間 $(-\infty, \infty)$ 上で定義された関数とする。この時、

$$H[H(\phi)](x) = -\phi(x) \quad (6)$$

が成り立つ。これは、Hilbert変換の逆変換 H^{-1} が

$$H^{-1} = -H \quad (7)$$

である事を意味する。

Hilbert変換の性質3(一般化されたParsevalの等式)

$1 < p_1, p_2 < \infty$ として、関数 $\phi_1(x)$ 及び $\phi_2(x)$ をそれぞれ L^{p_1} 及び L^{p_2} 空間に属する関数とする。この時、

$$\frac{1}{p_1} + \frac{1}{p_2} = 1 \quad (8)$$

ならば、

$$\int_{-\infty}^{\infty} \phi_1(x) \phi_2(x) dx = \int_{-\infty}^{\infty} H(\phi_1)(x) H(\phi_2)(x) dx \quad (9)$$

が成り立つ。

Hilbert変換の性質4

$1 < p_1, p_2 < \infty$ として、関数 $\phi_1(x)$ 及び $\phi_2(x)$ をそれぞれ L^{p_1} 及び L^{p_2} 空間に属する関数とする。この時、

$$\frac{1}{p_1} + \frac{1}{p_2} < 1 \quad (10)$$

ならば、

$$H[\phi_1(y)H(\phi_2)(y) + \phi_2(y)H(\phi_1)(y)](x) = H(\phi_1)(x)H(\phi_2)(x) - \phi_1(x)\phi_2(x) \quad (11)$$

が成り立つ。

有限区間におけるHilbert変換

$1 < p < \infty$ として、関数 $\phi(x)$ を L^p 空間に属し、区間 (a, b) 上で定義された関数とする。この時、 ϕ の有限Hilbert変換 $\mathcal{J}(\phi)(x)$ を

$$f(x) = \mathcal{J}(\phi)(x) \equiv \frac{1}{\pi} \text{p.v.} \int_a^b \frac{\phi(y)}{y-x} dy \quad (12)$$

と定義する。ここで、関数 $f(x)$ は(12)式によりほとんど至る所で定義され、 $f(x)$ もまた L^p 空間に属する。

有限Hilbert変換の性質

$1 < p_1, p_2 < \infty$ として、関数 $\phi_1(x)$ 及び $\phi_2(x)$ をそれぞれ L^{p_1} 及び L^{p_2} 空間に属する関数とする。この時、

$$\frac{1}{p_1} + \frac{1}{p_2} \leq 1 \quad (13)$$

ならば、

$$\mathcal{J}[\phi_1(y)\mathcal{J}(\phi_2)(y) + \phi_2(y)\mathcal{J}(\phi_1)(y)](x) = \mathcal{J}(\phi_1)(x)\mathcal{J}(\phi_2)(x) - \phi_1(x)\phi_2(x) \quad (14)$$

が成り立つ。

直観的には

(2)式の積分方程式の左辺は $\frac{1}{\pi}$ の違いを除けば、関数 $f(x)$ の有限Hilbert変換となっている。もし、有限Hilbert変換における相反定理がHilbert変換におけるそれと殆ど同じならば、両辺に有限Hilbert変換を施し -1 倍することで(2)式の積分方程式は解ける様に思える。しかし実際には、Hilbert変換と同じ様な形の相反定理を有限Hilbert変換は持たない。

準備

本題に入る前にちょっとした準備を行う。

まず、区間 (a, b) 上で定義された関数

$$\frac{1}{\sqrt{(b-x)(x-a)}} \quad (15)$$

の有限Hilbert変換を考える。これは区間 (a, b) 内で恒等的に0となる。つまり、

$$\mathcal{J} \left[\frac{1}{\sqrt{(b-y)(y-a)}} \right] (x) = \frac{1}{\pi} \text{p.v.} \int_a^b \frac{dy}{(y-x)\sqrt{(b-y)(y-a)}} \quad (16)$$

$$= 0 \quad (x \in (a, b)). \quad (17)$$

しかしながら、区間 (a, b) の外では、

$$\mathcal{J} \left[\frac{1}{\sqrt{(b-y)(y-a)}} \right] (x) = \frac{1}{\pi} \int_a^b \frac{dy}{(y-x)\sqrt{(b-y)(y-a)}} \quad (18)$$

$$= -\frac{1}{\sqrt{(x-b)(x-a)}} \quad (x \notin (a, b)) \quad (19)$$

となる。

次に、区間 (a, b) 上で定義された関数

$$\sqrt{(b-x)(x-a)} \quad (20)$$

の有限Hilbert変換を考える。これは(17)式を用いることで、

$$\mathcal{J} \left[\sqrt{(b-y)(y-a)} \right] (x) = \frac{1}{\pi} \text{p.v.} \int_a^b \frac{\sqrt{(b-y)(y-a)}}{y-x} dy \quad (21)$$

$$= -x + \frac{a+b}{2} \quad (22)$$

と求まる。

積分方程式の解

解くべき積分方程式は

$$\text{p.v.} \int_a^b \frac{f(y)}{y-x} dy = g(x) \quad (23)$$

であったが、これは有限Hilbert変換を用いて

$$\mathcal{J}(f)(x) = \frac{g(x)}{\pi} \quad (24)$$

と書ける。

まず、有限Hilbert変換の性質の(14)式において

$$\phi_1(x) \equiv f(x), \quad \phi_2(x) \equiv \sqrt{(b-x)(x-a)} \quad (25)$$

とする。これは(22)式及び(24)式より、

$$\mathcal{J} \left[f(y) \left(-y + \frac{a+b}{2} \right) + \sqrt{(b-y)(y-a)} \frac{g(y)}{\pi} \right] (x) = \frac{g(x)}{\pi} \left(-x + \frac{a+b}{2} \right) - f(x) \sqrt{(b-x)(x-a)} \quad (26)$$

と書ける。ここで(26)式の左辺第1項に着目すると、

$$\mathcal{J} \left[f(y) \left(-y + \frac{a+b}{2} \right) \right] (x) = \frac{1}{\pi} \text{p.v.} \int_a^b \frac{f(y)}{y-x} \left(-y + \frac{a+b}{2} \right) dy \quad (27)$$

$$= -\frac{1}{\pi} \int_a^b f(y) dy + \frac{g(x)}{\pi} \left(-x + \frac{a+b}{2} \right) \quad (28)$$

の様に分けることが出来る。この時、(28)式の右辺第1項の積分を

$$C = \int_a^b f(y) dy \quad (29)$$

とおく。ただし、 C は定数であり、規格化定数としての意味を持つ。また、(28)式の右辺第2項は(26)式の右辺第1項と等しい。この事を考慮すると(26)式及び(28)式より、

$$-\frac{C}{\pi} + \mathcal{J} \left[\sqrt{(b-y)(y-a)} \frac{g(y)}{\pi} \right] (x) = -f(x) \sqrt{(b-x)(x-a)} \quad (30)$$

が言える。従って、(23)式の積分方程式の解は

$$f(x) = \frac{C - \text{p.v.} \int_a^b \frac{\sqrt{(b-y)(y-a)} g(y)}{y-x} dy}{\pi \sqrt{(b-x)(x-a)}} \quad (31)$$

である。

参考文献

- Giacomo Livan, Marcel Novaes, Pierpaolo Vivo, Introduction to Random Matrices Theory and Practice, Springer, 2018.
- F.G.Tricomi, INTEGRAL EQUATIONS, INTERSCIENCE PUBLISHERS, 1957.
- E.C.Titchmarsh, INTRODUCTION TO THE THEORY OF FOURIER INTEGRALS, Oxford University Press, 1937.
- Javier Duoandikoetxea, Fourier Analysis, American Mathematical Society, 2001.